府立松原高等学校 「学校運営協議会」報告書（第1回）

<table>
<tr><td>日　時</td><td colspan="4">令和4年7月9日（土） 14：30～16：30</td></tr>
<tr><td rowspan="11">出席者</td><td>運営協議会委員</td><td>職名等</td><td>学校事務局</td><td>校務分掌等</td></tr>
<tr><td>房本　晃</td><td>（福）バオバブ福祉会理事</td><td>島津　邦廣</td><td>校長</td></tr>
<tr><td>菊地　栄治</td><td>早稲田大学教授</td><td>麦田　伸一</td><td>教頭</td></tr>
<tr><td>坂井　啓祐</td><td>四天王寺大学教授</td><td>中川　泰輔</td><td>首席・1学年代表</td></tr>
<tr><td>野崎　和枝</td><td>本校PTA会長</td><td>伊藤　あゆ</td><td>首席・3学年代表</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>山口　裕子</td><td>人権教育主担</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>眞杉　凌</td><td>人権教育主担</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>佐藤　智美</td><td>人権教育主担</td></tr>
<tr><td colspan="4">教職員等</td></tr>
<tr><td colspan="4">小林　美由里（1 学年）　関戸　利洋（1学年）　山本　杏寿（1学年）
亀田　恵美（2学年代表） 市橋　菜津美（2学年） 太口　雅之（2学年） 荻野　敦紀（3学年）　後和　伸之介（3学年） 田中　大樹（3学年） 山下　剛史（3学年）</td></tr>
<tr><td>主なテーマ</td><td colspan="4">今年度の方針と計画</td></tr>
<tr><td>協議内容
の概略</td><td colspan="4">今年度の重点項目
・学校経営計画及び評価（校長）
・49 期　産業社会と人間とりくみ（中川首席、山口指導教諭）
－観点別の各評価は誰に向けられているか。
－産業社会と人間の位置づけが変わってきた。「自分と社会（＝他者）をつなぐ」ために、自分の意見を言うまでの安心の醸成は、HR 合宿の 1 泊 2 日ではたりない。境界線をはじめ「ノリ」の違いを可視化するワークを 48 期から引き継いできた。
実際のワークショップを参加者と体験。
－八尾北高校の「社会の扉」の学びが、だんだん自己から外に向かっていくプロセスや「えんぱわめんと堺」のワークを通して生徒が他者に寛容になっていく姿があり、参考にした。</td></tr>
<tr><td>提言内容・
改善方策等</td><td colspan="4">・「ノリが違い」で済ませてしまう危うさがあって、その先の面倒くささをほぐしている。
「ちがい」は埋めるもの？ －どう大事にできるか
・時代の変わり目に、こういったワークが出てくる。「ちがいのちがい」は、ニューカマーが増えて在日外国人教育の変わり目に出てきた。グローバル化がより進んだなかで、何の時代を迎えたか。
・合宿を、他者とのつながりが創造できないなかでやり続けること。ゲームだけでなく、40 人を知っていく努力を相変わらず進めていかないといけない。境界線の YES、NO の答えは、個の経験が裏打ちしている。そこを大切に。
・25 期生（総合学科 3 期生）のときよりも進化している。「他者とのちがいをみとめる」とい</td></tr>
</table>

	う大学生は多いが、具体的にイメージをすることは難しい。 ・サマートライウィークで発表を見た。慣れている姿に生きる力を感じた。聞く側も能力にたけている。 ・教室でのネガティブな発言や他者との距離感の課題など、ワークを通して初めての気づきやいろいろなことが「頭の中を駆け巡る」様子があった。 ・I メッセージを大切にしたら、気持ちや生い立ち、自分の話がスムーズにできる。自分も実践している。 ・松原高校の生徒は「ありがとう」をすごく言える。自分も言う回数が増えた。 ・身の回りや生活の疑問を真剣に考えている。クラスで話すときに、聞いてくれる安心感がある。 ・学校だからこそできることは「生徒同士が認め合う」こと。そのために、安心できて否定されない、ちがいをちがいとして認めること。 ・「みんなちがってみんないい」を、ただの言葉としてだけでなくて、実感している。人に希望を持っている。カリキュラムの強さがある。 ・人間を見るまなざしが、「人ってそんな簡単に分かれるものではない」から、もっとよく知りたいと思っている。先生方が、違う自分に出会って学んでいる。その姿が生徒とのかかわりに投影されている。自分も相手も、人間の可能性を見捨てない＝優しいチカラ。 ・教育庁からの視察に帯同して1年生の LHR を見た。自立支援コースの成り立ちを劇にしていて、新たに来られた先生が嬉しそうにカメラを構える姿は、うらやましかった。